

末期浮世草子研究——其鳳と一芳——

篠原進

個人的な感慨を記すことを許されたい。昨年、本誌三九号に掲載した拙稿「怪を談ずるの癖」（名槌古今説）序を有する奥路が吉文字屋の出版戦略下でどう変容したのかをたどり（其鳳と改名したのもその一環なのだろうか）、その模索と混乱に末期浮世草子の断末魔が典型化されていることを確認したのであるが、もどかしい思いを禁じ得なかった。

濱田啓介の仮説に拠れば、奥路こと佐川了伯は自堕落南無散人、大雅舍其鳳とも号し、大坂の吉文字屋市兵衛方から二〇編ほどの浮世草子を著している。ところが、広告や割印帳などで上梓を確認できる幾つかの作品が、いまだに所在不明なのだ。『敵討孝子伝』もその一つであるが、拙稿の校了後に近藤瑞木氏から勝又基氏が最近該書を手に入れたという朗報がもたらされた。ただ嬉しさの半面、不安もないわけではなかった。新発見の一書が、やつとの思いで組み立てた拙いパースペクティブ

を一変させてしてしまう恐怖があったからである。なるほど、資料の力は強い。だが、新資料の出現を怖れるあまり萎縮し、無難な「（事実の）報告」に終始していたのでは、文学研究の魅力は半減してしまうだろう。ガラス細工のように脆い仮説が新資料によって突き崩されるなら、それも本望。それを踏まえて、最初から構築し直せば済むことだ。そう開き直って氏に手紙をしたためた次第である。

以下は勝又氏のご厚意で拝読を許された、『敵討孝子伝』についてのノートである。結論を先取りすれば、該書の出現で拙稿の論旨が大きく揺らぐことはなかった。だが今回の資料で、明和末から安永初期の其鳳の模索ぶりがより鮮明になったと言えるだろう。該書の詳細については所蔵者である氏の研究を待つとして、ここではマナー上あくまでも拙稿の「補注」の枠内で述べることにする。

『敵討孝子伝』は半紙本四卷四冊（巻一欠。巻二・巻五）で、刊記は次のごとくである。

「天明八年戊申春

大坂書肆 心齋橋南四丁目

吉文字屋市兵衛蔵板」。

『太平記秘説』（天明二年）以後、其鳳の作が絶えていることを考えれば、「天明八年」という刊記を有する本書は後印本の可能性が強いが、そのことを考えるためにも『敵討孝子伝』が成立するまでの過程を改めて振り返ろう。周知のごとく、京都大学文学部図書館蔵『焰魔大王日記幞』（明和九年辰年十一月吉日／大坂心齋橋南四丁目／吉文字屋市兵衛板）巻四末には、以下のごとき予告が載る。

一 敵討孝子傳 かたきうちかうしでん よみ本絵入 全部五冊

きんねんたしかなる敵討の実説かう／＼の心をもつて討かたき敵をたやすく討得たる物がたりおもしろき本二御座候当ねん出来仕候御もとめ御らん可被下候

「当年」、すなわち明和九年中には「出来」しゅったいしていたはずの本

書。だが、それがすぐに日の目を見ることはなく、出版の申請まで三年余の時間を要することとなる。「割印帳」³の安永四年九月二七日の部分には、其鳳の『珍術罌粟散国』（安永四年八月出願。全五冊。板元売出 吉文字屋次郎兵衛）、米山鼎蛾（案）『地切絵図』（安永四年九月出願。折本一冊。同 同人／當時須原屋茂兵衛）に続き、本書の出版が申請され、割印をうけている。

安永四正月

敵討孝子伝 全五冊 作 其鳳 板元売出し 同人（引用者・注。吉文字屋次郎兵衛）

墨付五十六丁

明和九年（一七七二）の広告から、割印（安永四年（一七七五）まで約三年、また割印から上梓（刊記は天明八年（一七八八）正月）まで一三年というタイムラグ。後者に関しては「市兵衛」刊のそれを後印本と考えることで説明がつくが、広告から割印までほぼ三年という時間を要した理由については考えてみる必要がある。長谷川強は「この辺の事情は原本を得て考ふべきであらう」（『浮世草子考証年表—宝永以後—』）と判断を保留しているが、今回出現した「原本」はその「事情」を語ってくれるだろうか。

「石山の敵討と世の人の美談となれることの葉のさかへしげんで目出たかりけれ」（巻五の三）と結ばれているごとく、本書

は某年二月石山寺で父・藤江幸介の敵・梯甚太左衛門を討ち、本国の備前にち崎に帰国して旧知に三倍の加増を得た遺児藤江幸太郎（二二歳ニヶ月）の敵討譚である。該書は巻一が欠本となつてゐるため、正確な内容は不明であるが、細かく筋を追うことで、それを補いたい。

○〔敵討ちの発端〕

備前にち崎の武士・藤江幸介は、傍輩の梯甚太左衛門が馬場先で投じた悪言への怒りをどうしても抑えきれず（一朝のいきりにその身をわたす、にはあらず。ちたびも、たびかんにんのむねをさすりけれども、ば、さきの悪言）、妻・お磯に遺書を残し、梯の屋敷で決闘する。

戦いは互角であつたが、幸介は梯の下人に背後から襲われ絶命する。卑怯な梯は証拠隠滅のため二人の下人を殺し逐電したが、検死に來た大目付の菱野紋右衛門はそれを見抜く。お磯への遺書で幸介は老母の世話と子の養育を依頼し、梯を討ち漏らした場合は子の幸太郎（六歳）に討たせるよう述べる（巻二の「幸助死骸見分之事」）。

お磯は実父の並松宮内に経緯を話すが、老母は自分の命の長さを恥じる。梯はお家追放、幸介の家屋敷も没収される（巻二の「幸助宅へ役人來る事」）。

○〔幸介の遺族の苦惱。老母の自害〕

宮内とその嫡子・数馬は助太刀をめぐり口論。すなわち関口流の使い手である梯を討つには自分の力が不可欠とする数馬を、宮内は「猪武者」と叱る（巻二の三「並松宮内教訓の事」）。

九歳となつた幸太郎は遺言に従い田鶴浦渡方で武芸修行をすることにする（巻三の一「旅立の相談決定の事」）。

助太刀をめぐつて宮内と数馬は再び争うが、草履取の宅平が宮内のお供をするということで決着する（巻三の二「並松夫子助太刀を論ずる事」）。

屋形様から敵討ちの許可をとり、出立する朝、老母は自分を案ぜぬようにとの遺書を残して自害する。皆是老母の死に、敵討ちの決意を強くする（巻三の三「親子主従首出の事」）。

○〔幸太郎の修行。敵の探索。田鶴浦と宮内の死〕

紀州河辺で船を下り、一行は神宮にある田鶴浦の屋敷に到着。外出先から戻つた渡は経緯を聞き、柳生流の同門ということもあり幸太郎を預かることとする。宮内は宅平とともに大坂に近い鳴野村に隠れ住み、敵を探す（巻四の一「紀州神宮に着事」）。

一二歳となつた幸太郎は剣術の腕を上げるが、体調不安の田鶴浦は河内八尾の和田殿に仕官している榎北小紋治を頼るよう言い、若党関右衛門を同道させる。宮内方に到着した幸太郎の一行に、田鶴浦が死んだという報せが届く（巻四の二「幸太郎母子鳴野村へ行し事」）。

八幡に蟄居している樟北を訪ねる途中で宮内が倒れ、死ぬ。七年間に四人の死を体験した遺族たちが嘆く中で、宅平は梯が安達軍六郎と改名して八幡にいたることを突き止める(巻四の三「並松宮内卒中風の事」)。

○〔敵討ち〕

樟北は幸太郎の腕を試し歓迎する。だが敵が安達と知ると顔を曇らせる(巻五の一「主従八幡に至る事」)。

彼は言う、自分は和田家の師範を八年勤めていたが、新参者で未熟な安達は若殿の軍学指南役であることを笠に着て「度々放言」があり、自分と口論することもあった。それを「偏執しての事」と誤解されたのを嫌い、暇をとり引きこもった。それも今回、安達が詫びを入れたことで解決したが、敵討ちの後見をするに誤解されてしまう。幸い石山寺の麓にある本陣宿の主・明石屋須磨右衛門は外戚であるので、その助力を得て、明春二月石山観音に代参に行く安達を討てと(巻五の二「江州石山の麓に送る事」)。

明石屋に協力を約束され、郡代に敵討ちを申請して手筈を整えた幸太郎であったが、思わぬ難題に直面することとなる。それは、彼の射た矢が隣家の子に当たり、親が奉行に「へんくつに申」したため、子の傷が癒えるまで牢舎という羽目となったからである。それも、宅平が身代わりとなることで解決し、敵討ちを成就させる。一二歳二ヶ月の幸太郎は、三月中旬に備州

へ戻り、藤崎殿から、三倍増の加増を受け、近習役となる。そして、この話は「石山の敵討と世の人の美談となれることの葉のさかへしげんで目出たかりけれ」と結ばれる(巻五の三「幸太郎母子帰国の事」)。

二

事件の勃発、被害者の親族や関係者の苦悩と流浪、敵討ちの決意と準備、敵討ち、めでたく帰国して旧知を回復するという敵討小説の文法。本作にもそれは貫かれており、内容をストレートに示す章題も含め実録風であることは間違いない。さながら挿絵入りの版本実録。浮世草子と呼ぶには遊びが少な過ぎるかといつて実録とも言い切れない「汽水域」の小説。つかみの部分に該当する巻一を欠くという点を割り引いても、凡庸な作品であることは否定できない。助太刀をめぐる宮内、数馬父子の口論が二度も描かれている点などはその典型であるが、幸太郎が頼る田鶴浦渡、樟北小紋治らも存在感が希薄で、脇筋をストイックなまでに抑制した生真面目な構成は小説としての膨らみを奪い、結果的に面白味を欠くものとなってしまう。

問題は他にもある。周知のごとく吉文字屋の浮世草子の挿絵は、俗に吉文字屋様式と呼ばれるごとく「見開き一丁ではなく一丁の表と裏に半丁づつ一場面を入れ、そして画面の上部に本文と必ずしも密着しない故事・教訓などを書き込」む、特異な構成をとる。だが、本書の挿絵はそうした様式をとらず、見開

き一丁に一場面もしくは異時同図の二場面が台詞入りで描かれ、故事・教訓などの書き込みはない。従来の吉文字屋本と一線を画す本書の挿絵は、浮世草子と呼ぶことを躊躇させる平凡な内容と関係があるのだろうか。

もちろん、細部には見るべき点もある。たとえば、一行が渡の留守宅を訪ねる一連の場面の描写。家来行き届いた応対。渡の警戒心や観察ぶり。そして、心情。家来たちが「そ意なく」応対してくれるのも自分が健在な内という、主人と使用人の力関係。そういった微妙な心理を巧みに吸い上げているのだから、脳卒中の典型的な症状としては軒が知られているが、宮内が倒れる場面も、「只いびきのこへのみきこへて卒中風」と記されている。こうした描写は、「怪」の伝達に専らだった奥路時代にはあまり見受けられない特質でもある。彼にどんな変化があったのか。それについては、次節で考えることとして、最初の問いに立ち返ろう。本書はなぜ、広告から割印まで三年もの年月を要したのか。

前掲の広告に言う、「きんねんたしかなる敵討かたきうちの実説じつせつ」。この記述はどこまで信憑性を持つのだろうか。というのは、一見実話風の本書にも先行作品の趣向を利用した部分が散見するからだ。たとえば、老母の自害。王陵の母の故事を踏まえた、その先型は『基盤太平記』（宝永三年）にあった。大星由良之介・力弥父子の門出の日に自害する、由良の母と妻。そこには「主君の敵の師直に母の仇妻の敵」と記され、其碩の「けいせい傳受

紙子』（巻一の五・同七年）にも応用された趣向だったのである。

また、「石山やにほの海照る月影は明石も須磨も外ならぬかは」という歌に拠った石山の明石屋須磨右衛門。また菱野紋右衛門、田鶴浦渡という人名も安易だ。何よりも「石山の敵討」の実否が確認出来ない。ちなみに其鳳が石山付近を舞台にする例は多く、『焰魔大王日記帳』巻五は江州石山の清七の話でもある。琵琶湖周辺を舞台にとるのは『本朝三筆伝授鑑』も同様であり、思えば『名植古今説』の冒頭話も琵琶湖に近い篠原堤を舞台にしていた。ともかく、「石山」が敵討事件の実在性を担保することには繋がらないのである。

その一方で、神宮（新宮）といった地名など、モデルを意図的に隠蔽するような記述も散見する。広告から割印まで三年を要した一因がモデル問題にあった可能性は高いが、確証のとれぬ課題をこれ以上論じても仕方がない。結論は保留するとして、当面は其鳳がこの時期にこうした作品を手がけたことの意味を探ってみよう。

三

『敵討孝子伝』は其鳳の作品群の中にどう位置付けられるのか。それを考えるために、改めて彼の作品を振り返ってみよう。「怪を談ずるの癖」（『名植古今説』序・明和八年（一七七二）正月）を自認する奥路の本領は、短編奇談集『諸国咄』にあった。それは、『最明寺殿（北条時頼）』（『最明寺殿諸国物語』同）、「西行」（『西行諸国咄』

同九年正月」といつた人物名を冠した諸作や、「西海」「西海奇談」同八年）でまとめた作品においても同様である。

ただ、それらすべてが彼のオリジナルというわけではない。一例をあげよう。「其説 悉く予が近くしたしむ方より得て直にその人を章後に経緯たり。なを里の名の区々なるは、頗る伝聞のたがひもあらんとなむ」(序)と記すことで、事実性を担保していた「西海奇談」。その冒頭話(巻一の二)「儒生壓妖」は以下のような話だ。

長門の国の曾我伴佐という儒者は、「唐宋の異端に混じたる性理の学もふるめかしと、近頃但徠先生が道義」を慕い、「もつぱら江戸学を好みかはらけ色の表紙にむてんをひねくり向う上の一路(引用者・注。思慮の及ばない最上の一義という仏教語)に遊んで」いたが、ある夕暮れ一人の老翁が出現して「くされじゆ者」と悪言する。だが、伴佐に一喝されて退散。その後、天井から巨大な手が出て、さまざまに嘲弄する。怒った伴佐は朱筆を取り、その掌に次のように記す。

元来古入道 妖様不知新
骨折昨今夜 瘦腕与老人

「かの無鬼の論を書し例も思ひ出られ」、化物は狼狽して消える。以後、度々出現して、それを消すよう求めることとなる。五、六夜もそれが続いた後、伴佐は「そのれがこときもんもうぐちの畜生は真四角なる文字はがてん行まじ。いでやはらげてとらせんと」、腕に次のような狂歌を記し、柱に縛り付ける。

さだまりの高入道には化をらでいらぬ手出してらく書にあらふ

当初は罵っていた化物も諦めて謝罪したので、それを洗い落とし縄を解いてやると、「三拝九拝はらづ、みを打てかへ」ったことで、古狸の骨張と判明する。伴佐自身が語ったのを「何がしの茶談にはらすじをよりしか」と結ぶ。

長谷川強は本話の典拠を「百物語評判」二の二又は「一夜船」一の二とする。「皇明通紀」に拠ると典拠を明かす前者は、大明の時代に鄭智が読書の邪魔をする狸の手の中に「花」という字を書いた話だ。また後者はそれを木下長嘯子の逸話としている。類話は多く、『異聞総録』巻三は「馬少保公保」が若い時窓際で本を読んでいると、扇のように大きな手が窓の穴から出現する。次の夜もまた来るので濡れ筆に「雄黄水」を付け、大きく「花押」を書く。早く消さないと手を戻すことができないと訴えるので、落してやると消えるという内容である。

奥路が何に拠ったのか、確定はできない。ただ注目すべきは、吉文字屋様式をとるその挿絵に「化物の手を見るに、何れもことの外、大なるもの也。此手のつもとりにては、二階天井などに居ることはならず。扱むかしも、ばけ物の手へ雄黄にて物を書しかば、恐しとなり。雄黄はよく怪をさへるとぞ」と付記していることである。「雄黄」という語を見る限りでは、『異聞総録』が近いことになる。いずれにせよ、奥路が従来の素材を巧妙にアレンジする作者であることはこの一例を以ても明らかであり、

序文の記述を文字通りには受け止めることができないのである。話を戻そう。前掲の諸作品は大坂・吉文字屋市兵衛と江戸・

吉文字屋次郎兵衛の相板であるが、それに大坂・藤屋弥兵衛の加わった『弁説叩次第』（明和九年正月）にあつても基本的な性格は変わらない。儒者の窮屈齋のもとに集う怪談好きの人々が怪異譚を語るという体裁をとる本書には脚色が際立ち、一話全体が長くなる傾向が見られるようになる。とりわけ注目したいのが巻一の二・三である。信州更科出身のおすては、しなという名で、あかしやという富家の隠居（俳名は戸丸）に奉公する。そこでは三日にあけず詩会、歌、連歌、俳諧の会が催され、釜の座の禪門・宗圓は、しなにも一句詠じさせることとなる。しなが「こよひの月はそらにありけり」と下手な句を詠んだので皆は嘲笑したがそれを苦にした彼女は、その夜の明け方、井戸に身を投げる。夜が更けると、井戸から火が出て、「こよひの月はそらにありけり」と恨み事を言う。それを見た戸丸の師匠・秋花堂万可が、「山風の岩間のながれ氷り来て／こよひの月は空にありけり」と詠むと鎮まり、以後出現しない（巻一の二・三）。本文中に「まへかたしばいでもしたばんしうさらやしき。それはむせいはいをうらみしなればさもあるべし」とあるごとく、これが「皿屋敷伝説」をアレンジしたものであることは間違いない。全国「数十ヶ所」に残るという、お菊の伝説。その詳細については、小田誠二の研究に詳しいので触れないが、それらのどれに比しても特異さが際立っている。この時期の奥路は

周知の怪異譚を咀嚼、再構成し、新しい怪異笑話を紡ぎ出す作者に妥容してもいたのだ。

そうした傾向は続編と言うべき『籠耳覚日記』（明和九年正月）に顕著で、『堀川波鼓』を彷彿とさせる話（巻一の二・三）や諸葛孔明の子孫の登場（巻四の一・三など）芝居のしぐみにある図（巻一の三）を用いることが際立ち、脚色が多い分だけ長くなり、結果として中編化することになっている。

『酒色財』という「三病」の妙薬としての「文武」を標榜する中編奇談物『文武酒色財』（同）から、島原の太夫九重の波乱に満ちた生涯を描く長編遍歴物『女武者修行』（同）へ。短編から中編、長編作者へと大きく姿を変えて行く中で「奥路」の名を記す作品は終わり、自陀落南無散人名の長編遍歴物『三千世界色修行』（同）を挟み、其鳳名の中編奇談物『焰魔大王日記帳』（同年一月）に至ることとなる。第一節に述べたごとく『敵討孝子伝』はこの時期の作と考えられるが、其鳳はこれ以後二年ほどの空白を挟み、中国白話小説を翻案した長編『滅多無性金儲氣質』（安永三年（一七七四）正月）、中編『月花通鑑』（同七年正月）、一部に翻案の形跡が確認できる『太平記秘説』（天明二年（一七八二）正月）、人気浄瑠璃『菅原伝授手習鑑』の世界に白話小説から得た趣向を取り込んだ『本朝三筆伝授鑑』（安永六年（一七七七）正月）、奇想の『珍術髻粟散国』（同四年正月）、氣質物『当世宗匠氣質』（同一年正月）など多様な作品を吉文字屋から上梓することとなる。

『焰魔大王日記蝶』と『滅多無性金儲氣質』の間に横たわる、二年の空白。その空白と『敵討孝子伝』の上梓が関係するの否かは分からない。ただ、それ以後、従来の作とは異質な長編が其鳳の名で陸續と発表された事実は、この時期がさまざまな意味で模索期であつたことを物語っている。実録風の敵討小説というのも、そうした模索の一環だつたのではないだろうか。予兆はあつた。たとえば、前掲の『弁説叩次第』。前号で既に述べたごとく、その巻五は、両親の敵を狙う蝦蟇仙人の召使（蓼蛙）に加担し本懐を遂げさせた原田貫兵衛の活躍を描く巧みな一話となっている。それは、さながら敵討物の伝奇小説でもあつたのである。

四

荻坊奥路の模索。それを考える上で、気になる資料が二つある。一は京都大学図書館蔵の写本『薄寛閑事集』（全一五巻五冊）柱に「かし本／大野屋」とある本書は、寛延三年（一七五〇）秋、僚舍亭に「懇友の其鳳、和光、篁家、素計」らが集い、連俳や実録的な話を楽しむという内容。この「其鳳」が大雅舍其鳳か否かについては稿を改めて述べよう。二は大阪市立大学図書館森文庫蔵の写本、『明和播陽政実録』だ。とりあえず、序文を示す。

「明和播陽政実録 叙」

この比異客ありて、過し明和の始、播磨の国三ヶ月の家中に

実女を奪ひ取して立退しを尋ね得てつれ帰り、父なる人手に懸たりしを、某の美談一怪事なるを語るを、あいたにのみ聞捨なんも書意なす態にもやと秃筆を（序）はせて其儘を写しとりて全部十巻。人々の慰草ながら勸喜微惡のた年とも世に詩散せは、鄙俗の花榮へ、詞の葉の茂りて、心もうこきて実のみのりともならんかし。

安永巳の春 荻坊主人題。

「安永巳の春」、すなわち安永二年（一七七三）の正月に「荻坊主人」が手掛けた実録。もちろん、序文にある「荻坊主人」が奥路である確証はない。その上、現存するのは一〇巻中、前半の五巻のみという不完全さ。それでも、巻一〇までの目録は残っているし、何よりもそれが其鳳の「空白期」（前掲）に書かれていることの意味は大きい。ともかく、内容を確認しよう。

序文にあるごとく、本書は明和初年（一七六四ころ）に播州佐用郡三日月の城主森対馬守俊春の大目付で譜代の大老古川新左衛門信俊の息女（いさめ）が、同家の足輕で美男の誉れ高い横田軍平と恋仲になり、松本文治との縁談を嫌って駆け落ちしたが見つかり成敗されるという事件を扱っている。

俊春は三日月藩一万五千石（領地は佐用・揖西・穴栗）の二代藩主・長記の二五男。享保七（一一）年生まれの彼は元文四（一二）年に父と同じ対馬守に任ぜられ、安永三年に致仕している（寛政重修諸家譜）。括弧内は「三百藩主人名事典」（新人物往来社）。すなわち、本書の記された安永二年当時、俊春はまだ現役の大名だったの

である。翌年の致仕と、このスキャンダルとの関係は不明だが、そもそも彼の祖父・長俊が当地に移ったのは、津山藩主で本家の森衆利が乱心を理由に改易されたためであった。¹²『西播怪談実記』（春名忠成・宝暦四年・吉文字屋市兵衛刊）に代表されるごとく、この地域と吉文字屋とは無縁ではない。

本書に拠れば森家は森蘭丸の血筋を引き、先代の森安芸守は江戸屋敷に出現した小坊主の頭を扇で叩いた祟り（？）のために、翌年逝去したという。対馬守に任ぜられ、その後継となる次男の豊之助。仁政をほどこす彼に仕える大目付古川新左衛門信俊は二五〇石で、八代前の先祖新六は信長秘蔵の小柄が紛失した際に容疑者となった森蘭丸を救い、信任を得たという譜代の家。その娘、いさめは「当世風の美男」の足軽・横田軍平に見初められ、歌を贈られる。

よそながら匂ひも知らん梅の花誰も盛をめかれずもがな
彼女の返歌

おもふそのなと余処に見ん梅の花あたに匂わぬいろ香なり
せば

これを契機に二人は深い仲となるが、いさめに松本文治（二四歳）との縁談が浮上する。

以上が巻五までの内容。以下は欠本となっているが、幸い巻一には以下のごとき「総目録」が載る。これを見る限りでは駆け落ちは失敗に終わり、いさめは父に斬られ、軍平も死ぬという結末のようである。

○巻六「新左衛門妻子に中倉との相談致す事」「井上泰庵新左衛門女房へ心付の事」「新左衛門女房義氣の事」。

○巻七「横田軍平いさめと欠落の事」。

○巻八「新左衛門憤りの事」「家老宅にて一家中申渡の事」

「新左衛門家長いさめを奪返すこと」。

○巻九「中倉弥次兵衛新左衛門へ内談の事」。

○巻十「古川新左衛門娘を手討にする事」「横田軍平西村にて最後の事」。

さながら、明和版の「忍び扇の長哥」（『西鶴諸国はなし』巻四の二）身分違いの恋。侍女に託したメッセージに言う、父は一昨日から出郷しており、母は伯母方に暮から出かけ留守なので、「部屋（部）の切戸をあけさせ置申さん。それよりかならず御しのびあれかし」と。それに応えての命懸けの逃避行と、破局。なるほど、両者の構造はよく似ている。ただ、決定的に違う点がある。それは自由恋愛に対する否定的な態度と、厳しいまでの道德観である。導入部に掲げられた警句に言う、「近代男女の礼儀、猥（わ）りになりゆき、父母の免しをまたずほしひま、に私に通じ、夫ある婦に戯れる族多し」と。そうした文脈からは、父が「娘を手討にする事」も許容されるのだろうか。

問題は、「荻坊主人」が「怪を談ずるの癖」を任ずる奥路その人であるか否かであるが、決め手はない。ただ、其風好み

の「怪」がないわけでもない。たとえば、森安芸守が死ぬ場面。目黒行人坂の西にある江戸屋敷で宵つぱりの彼が厠に行くと、七、八歳くらいの小坊主が出現する。扇子で頭を叩くと消えたので、妖怪を退治したつもりでいたが、その年の秋に病氣となり、翌三月中旬国元への帰途に立ち寄った桑名で安芸守は再び小坊主と出会う（巻一の四「森安芸守殿妖怪に逢事」）。京都の大医後藤養庵、大坂の北山古林などを呼ぶが手遅れで、結局は亡くなるという怪異譚（巻二の一「森安芸守殿逝去の事」）。

駆け落ち事件の実否はともかく、実在する森対馬守俊春を登場させるなど、章題の体裁も含め「実録」に背かない本書。もちろん、俊春の祖先を森蘭丸とし、古川新左衛門の先祖新六が彼の身代わりとなり、信任を得る一連の場面（巻三の一「織田信長公御秘蔵の小柄紛失事」同二「古川新左衛門先祖新六主人の為に盗賊となりし事」同三「盗賊の犯人露見の事」など潤色も目立つ。とりわけ注目すべきは、横田軍平をこう素描していることだ。

「生得きよらかに太からずほそからず中肉の心な男。色白なるこへ日夜顔にあらひこのたゆるひまなく衣服にかけ香のほひをくよろづにきやしや風流のみ殊とし髪ゆひふり当世上方の仕出しをとり勝れて伊達すきなるゆへ一際めたちける。そのうへ手跡は近衛流。その仮名のうつくしさ敷島の道にもいささか心がけありて、桜月堂か門下につらなり、あるひは茶香蹴鞠などの事のみ」と。また言う、「よの好色をかせぐには金銀の物入つよく困窮するはならひなるに軍平が好色は夫には引か

へ女のかたより種々の心づけありて小袖羽織の身のまはりより紙入楊枝さしたはこ入珍果珍物あたへ彼が身心舐うこかさぬやうに心つかひ」と。

一見、レトリックとは無縁と思える実録に挟み込まれた、執拗に長い描写。もちろん、江戸期の「実録」は必ずしもノンフィクションを意味してはいない。ただ、前掲のごとき脚色は本来、小説や舌耕の領分でもある。もし本書が奥路の手になるものなら、其鳳と改名する過渡期に彼は（「敵討孝子伝」も含め）実録風の小説の制作を模索していたことになる。それは「みちのみちしきもの」（「弁説叩次第」巻一の二）を嫌い、「実の実とすべきは、真の実にあらず」（「西海奇談」序）とうそぶく彼がめざした、実録と浮世草子との微妙なあわいに位置する新しい小説でもあった。

以上でいささか長い「補注」は終わるが、実録風の小説という点で触れておきたい人物がある。実録の風体を真似た小説を手掛けたとされる多田一芳のことである。

五

多田一芳の作品については、次の六種が知られている。

- ① 『和州非人敵討実録』（宝暦四年（一七五四））。
- ② 『敵討浮田物語』（明和七年（一七七〇））¹⁵。
- ③ 『¹⁶女敵討実録』（明和八年序・同一〇年刊）。

④『渡辺秘鑑』〔明和一〇年〕¹⁶。

⑤『敵討秘之錦』〔享和元年（一八〇二）〕。

⑥『絵本檻樓錦』〔文化六年（一八〇九）〕。

このうち、⑤⑥は①を後人が改作、絵本化したものであり、¹⁷実質は四作。順にみていこう。

①『和州非人敵討実録』（宝暦四年（一七五四））。江都書林 和泉屋平四郎。（割印）宝暦三年二月一日。板元江戸泉や平三郎。売出し須原や平左衛門。

内容は次のごとくである。

京都の小道具屋の娘：お巻は関西の城主、郡山殿との間に子・梅松をもうけ、総領の大富士丸よりも威勢を保つ。だが梅松は病死。郡山殿も三五歳で死ぬ。家来の彦坂甚六はお巻と密通し、家督を継いだ大富士丸を亡きものにして大殿の舍弟・勘解由を擁立しようと暗躍。薩摩山伏快長院の調伏で若殿は病氣となるが、高野山の寛弁阿奢梨が術を破る。

それでも彦坂の悪逆はやまず、仲間に加わらなかつた春藤治太夫を須藤六郎右衛門に殺させる。春藤の嫡子、次郎右衛門、才治兄弟は敵の須藤を一年余も探し回る。そんな才治に百姓五郎兵衛の娘・初は求愛するが、大望を抱く彼に断られ、大和郡山で三百石をとる須藤屋敷に奉公して手引きをすることになる。当時郡山では刀の試し斬りが流行。一人の非人が三浦新平ら

に殺されるが、木辻鳴川で隠し目付に捕まる。香村と改名した須藤は病身ということもあり進んで兄弟に討たれる。積悪があらわれ須藤を頼った彦坂も山賊に殺される。兄弟は初を伴い帰国して、敵討ちを報告。旧知を回復し、才治は初を娶る。

福井弥五左衛門が寛文四年ころに作り（『舞曲扇林』）、初代荒木与次兵衛（一六三七―一七〇〇）が演じて評判をとった（『佐渡島日記』）という、歌舞伎『大和国非人敵討』。浄瑠璃の『敵討檻樓錦』（文耕堂・三好松洛・元文元年）をはじめ、その影響作は多い。だが本書は独自の世界を有している。一芳は成立事情をこう明かす。

すなわち、本書は宝永末から享保ころまで大坂で活躍した舌耕の「勅使河原源内信行」の「講釈」に基づくもので、「愚老も若きときより」、「（源内の講釈が）大好物にて程遠き所にてもとはず。足を空に馳行其席に列り」（『新書起言』）聴いたが、「敵討の産国。城主の御名の。細に覚侍れ共。高官高禄の姓名を拙き身の。白地に紙上に頭さむも。おそれ憚て記さ」なかつた（同）と。

一芳が源内の講釈に興じたのが二〇歳前後とすれば、本書を手掛けたのは六〇余歳。「愚老」と自称しているのも、それに合致する。となれば、②③④を上梓したのは八〇余歳のころとなる。奈良生まれで、「摂陽浪速旅客」の一芳。関西に地縁を持つ彼がなぜ、江戸の和泉屋平四郎方から本を出したのか。その辺の事情を探るために、もう少し彼の言に耳を傾けてみよう。

彼は言う、「世上の人口に。普く伝はりける。大和国非人敵討の事、実説とは雲泥の違あり」(巻五の四「非人敵討真偽の弁」と。慶安(一六四八)五二のころ九州に住む武士の兄弟が郡山で親の敵を討った一件と、同時期に同国大安寺の墓所で非人が殺された事件とが緋い交ぜになり「非人の敵打」と話題となったが、次第にその話題も立ち消えになる。ところが、その後「聞伝へし老人の物語に。己が作意を加て。大和国非人敵討と。看板に出し。彼与次兵衛に手負の勸致させ」た歌舞伎が上演されて一躍有名となった。「昔丞相の御立腹が雷と成て。時平を蹴殺し玉ふと。有を見て。博識の人は。臍をかゝゑ」てその「虚誕」を笑うが、「世の中には風流なる浮世草紙や。浄瑠璃本。歌舞伎狂言を。真受にしたる人」が数多くいて、自分も「先頃」泉岳寺に参詣した折、「人品賤しからぬ」人さえもが勘平やおかるの墓を探しまわっているのを目撃した。だが、「此書全部五巻は舌耕源内が講談の趣を基となし。猶浪花の老人の物がたり。又は国人に面談の折からは。くわしく尋明らめ。大和国の事實は下官が生国なれば。此事に付もる、事なし。世人専ら申伝へし物語の。いまだ書にとゞめざるも残多く。辛累年聞書したる物の中より。撰出して」(同)作った信頼のおける作品である。

「先頃」というのが、いつを指すのかは分からない。ただ、その記述を信ずる限りでは、一芳はそのころ江戸におり、赤穂浪士の墓に詣でていたことになる。和泉屋平四郎との繋がりは、

その時期に出来たのだろうか。注目すべきは、彼がここで「己が作意を加へ」「虚誕」の多い、「風流なる浮世草紙や。浄瑠璃本。歌舞伎狂言」を否定し、「くわしく尋明らめ」た「実」を標榜していることだ。そうした思いは、「実録」と題したことに凝縮されてもいる。もちろん、それがどこまで事実を伝えているのかは分からないし、そもそも彼が拠つたという「(源内の)講釈」の信憑性も疑わしい。ただ、ここで一芳が浮世草子や浄瑠璃本、歌舞伎狂言とは違う、かといって写本を前提とする実録とも違う、印刷された実録という新しい文学を志向していたことは注目して良い。

六

だが、これ以後しばらく一芳の作は消え、一六年后に再びその名を眼にする時には、「虚誕」の多い「風流なる浮世草紙」を否定した姿勢は一変していた。③の『「大和女敵討実録」の「序」』に、一芳はこう記している。「隣家の二人が語る」寓言「あまなり成事」と思ひしが、能おもへば浄るり、操又は歌舞伎狂言も都而偽を作つた物ゆへ、結局面白くおかしく、興になり、慰多し。実ばかりではかたくて面白からずと、我等もいつとなくうそ噺が好にな」ってしまつた。

驚くべき変容。一六年の間に何があつたのか。そして、「われ文のつたなきをいなむといへどもきかずして」(敵討浮田物語「序」、彼に執筆を勧めたのは誰だったのか。②③④のすべてが、

大坂の吉文字屋から上梓されていることから推測すれば、その
態憑に從つた可能性が高いが、不明な点も多い。ともかく、作
品を見よう。

②『敵討浮田物語』（明和七年（一七七〇）。（割印）明和六年九
月廿六日。全部五冊。多田一芳。板元売出吉文字屋市兵衛／売
出吉文字屋次郎兵衛。

本書は吉文字屋刊の『名槌古今説』（明和八年）に「五冊」と
広告が載り、「割印」からも半紙本五卷五冊と考えるのが妥当
であるが、所見の弘前市立図書館本は卷二、五が欠けている。
その「序」に言う、「此浮田の敵うちは、取わけ危ふきが中
もあやふく千苦万苦の難をのがれ、運にかなひ終にかたきを討
て俱不戴天の仇をはらしける物がたりの、実をばくわしく聞
しま、打置んも無下なりと書をきし」と。

永禄一三年二月上旬に両頭の亀が將軍義昭に献上され、吉田
かね成の占いに従つて元亀と改元する。当時の武將赤松備前守
吉次は山名相模守らとの戦いにことごとく勝利を収めるが、そ
の裏には浮田内匠秀治（九尺二寸の大兵、嶋村十郎左衛門直定
という二人の家老の存在があつた。両者は対照的で、出頭第一
の寵臣の浮田は「じや智ねいきよくにして政道わたくしありて
非道のさばきのみ多」く、「諸人夏日のごとくおそれ」たのに
対し、嶋村は「慈悲れんちよく」で「武士の手ほん」でもあつた。
浮田は嶋村を殺し、主人を亡きものにしようと思ひ、美女を

差し出して赤松の歡心をかう。浮田は奢り、「秦の趙高が鹿を
さしてむまかとたづねしに群臣かれが威せいにおそれていづれ
もよきむまなりとほめし」故事のごとく、わざと腐った吸物を
馳走しても、異を唱える者はない。

飯綱の幻術者・稲葉外記が赤松屋敷で数百株の牡丹や唐獅子
を出現させるが、嶋村は彼を疎んじ国外追放とする。それでも
赤松の奢りは止まず、農民や町人に贅を尽くした踊りをさせる。
（巻一）

浮田は殿の寵愛する錦（本妻もしくは愛妾）と密通。それが殿
に知れたので、殿の舍弟・斎に病身の殿を殺させる。錦の生ん
だ富丸（二歳）も浮田の子なのではないかと噂され、浮田は仕
方なく斎に家督を相続させるが、斎は舞子の小蝶に溺れる。弱
味を持つ斎が黙認したこともあり、その小蝶とも密通した浮田
はますます増長していく。

そんな家の事情を案じた嶋村は渋茶の接待を口実に浮田を招
き、数十人がかりで彼を殺す。浮田の妻は国を追われ、美作ま
じま郡下はた村の清兵衛を頼り、浮田との間の子・主膳を生む。
八歳になった主膳を備前国大寺村の伯母尼に預け、浮田の妻
は小西摂津守に奉公して嶋村を討つ準備をする。

一四、五歳となった主膳は三雲官藏に武芸を習うが、「つうれ
いにては此かたきはうちがたしわれうつけとなりて世の人をあ
ざむきかたきのゆだんを見すましほんもうを達」そうと、阿呆
を装う。そんな主膳を西大寺村の農民・孫兵衛の娘お六は恋

慕する。(卷三)

恋心が募り癩の病に襲われたお六を救った主膳は、彼女の両親に婿と認められる。一方、お六に失恋した彦作は、お六が轡轡首という悪評を立てる。二一歳になった主膳は敵討ちを決意する。そこへ、石川五右衛門の手下の熊蔵が押し入るが、それらを退ける。(卷四)

卷五を欠くのでその後の展開は分からないが、書名から判断する限りでは、主膳が嶋村を討つという結末が推測できる。暗愚の主君。それに付け込みお家乗っ取りを図る寵臣。争鬭の渦中で殺される家臣。その子の敵討ち。前作『和州非人敵討実録』との共通点が多い。ただ、決定的な違いがある。それは、大義名分の問題だ。「じゃ智ねいきよく」の浮田は殺されても仕方のないものであったし、正義に基づき彼を排除した嶋村を主膳が討つとすれば、敵討ちの大義を欠くことになる。悪人の子にも、親の敵を討つ資格があるのか。そうした命題にまだ見ぬ巻五は答えを準備していたのだろうか。違いは他にもある。例えば京都白河から播磨に現われ、さまざまな幻術を見せる稲葉外記。それを可視化した挿絵も含め、本書には読者を楽しませる趣向が随処に盛り込まれているのである。

「いろはふんべつの外といふ俗げんまことなるかな」、「よしつねは建礼門院にうき名を西海のなみにながし義貞はこうとうの内侍にいくさの図をはづして武めいを北国のゆきにうづみ」

(卷三の二)といった記述に多識ぶりを見せる一芳であるが、思えば『和州非人敵討実録』でも「此耳なし山は旧き名所にて。万葉集等にも。北山の哥有」(卷三の五)などと蘊蓄を傾けていた。そうした造詣とサービスピ精神とが、「万葉」を冠する娯楽小説の③を生むことになる。

③『和州非人敵討実録』(明和八年序・同一〇年刊(二七七三))。吉文字屋市兵衛・次郎兵衛。(割印)明和八年二月二十四日。全五冊。多田一芳。板元売出し吉文字屋次郎兵衛。

前掲のごとく、本書は次のごとき「序」を有している。

「拙者が隣家に二人の友有、南の仁は兎角の偽兵衛。北は亀毛の無右衛門と云。毎夜く見へて沙籠鑑ですなをかゝてのく寓言、あまり成事と思ひしが、能おもへば浄るり、操又は哥舞妓狂言も都而偽を作つた物ゆへ、結句面白くおかしく、興になり、慰多し。実はかりではかたく面白からずと、我等もいつとなくうそ噺が好になり、そろく染こみ、先手習初と、此本をば綴、莊子が大鵬と天秤で打て見るに」と。

「寓言」、「莊子が大鵬」といった寓言用語が気になるが、とりあえず内容を見よう。

占部兼武の不吉な予言が的中して、持統天皇が崩御。その機に乗じて、うねひ王子と須軽大臣が謀反を企てる。都を逃れた、はや人親王の御簾中・みなづき姫を守り、萩原一藤次は丹波国

厚身に向かう。彼は親王家譜代の家来であつたが、島原に通つたために阿呆扱いとなり、遊女あがりのお六と三輪に逼塞していたのであつた。だが王子方の南部式部左工門らに襲われて死ぬ。双子の弟の二藤次が姫を救うが、お六は遺児となつた岩松（五蔵）を連れてそこを訪ね、敵討ちを誓う。

彼女は岩松を剣術の達人竹内外記のもとで修業させ、彼が八歳となつた時に茸狩りに来た南条を討つ。

妖術を駆使する王子勢の攻勢を凌ぎ、命懸けで姫を護る親王側の市守長者や飛鳥長者。市守は大黒かりの小槌で異人を出現させて対抗し、親王を案山子姿で逃がした飛鳥は隠れ蓑、隠れ笠を宝器とすることを許される。また姫を匿つた歌の師匠・丸治には人丸の号が与えられる。そうした多くの者たちの力で王子と大臣を滅ぼし、親王は文武天皇として即位。市守の息女哥橋姫と飛鳥の子息采女の介も結ばれることとなる。

仏教を擁護する親王側の夏目摂政左大臣。それに抗して神道を唱える須軽大臣。哥橋姫に恋慕する王子。八咫の鏡の霊能。市守長者（日本伝奇伝説大辞典・角川書店・一九八六年）の大黒や、飛鳥長者の隠れ蓑・笠の伝説。万葉名歌は「持統天皇ははるすきて夏のころより御悩」（巻一の三）ともじられ、様々に付会される秀歌。角書に「万葉」とある所以だ。その巧みな「寓言断」は、「実録」の枠を大きく逸脱しており、一芳が曾て否定した「風流なる浮世草紙」への接近を示すものでもあつた。

姫を自宅に匿い、眠ろうとする丸治の耳に聴こえる山鳥の声。そこに「あしびきのやまどりのおのしだりおのながくしくよをひとりかもねん」という歌が配され、「日のもとの哥とあふくべし」と姫が丸治に授ける「人丸」の名（巻三の二）。八文字屋刊の『柿本人麿誕生記』（宝暦二年）を彷彿とさせる古典や故事の俗解。「西鶴其碩が筆まめに面白事ありたけを書つくし、南嶺が口車くるく廻る舌の尖でめづらしき事をねぶりまはしたあとへ、近ごろ流行、弁慶がしり餅を、正成が軍法でちぎらせ、酒吞童子が灸を楊貴妃がすてやるなど、木に竹をついだ趣向」（『俄仙戯言日記』序・安永二年）とあるごとく、これ以後（吹寄）〈綯い交〉と呼ばれる「木に竹をついだ趣向」が浮世草子を席卷することになる。そうした時流を先取りした本書の趣向の裏に吉文字屋の存在があつたのだろうか。

④【館文渡辺秘鑑】（明和一〇年刊（一七七三））。吉文字屋市兵衛・次郎兵衛。（割印）明和九年六月二六日。作者多田一芳。板元売出し吉文字屋次郎兵衛。

「花見ゆさんも先酒が一番／＼野中の開帳に参詣しても戻りに田楽酒など引かけねばおがんだ様二ない」（序）と、左党を公言する「箕踞庵 多田一芳」。内容とは無縁の融通無碍な序文が意図するのは、酔中の作ゆえに駄作となつてしまったという自己弁護なのだろうか。源頼光四天王の世界を中心に様々な（吹寄）を試みた「寓言断」。だが内容は③の作者とは思えないほ

ど低調で、『和州非人敵討実録』であれば「実」にこだわった一芳とは別人のような仕上がりとなつてもある。

安倍清明と別泰成は藤原高明の謀反を予知。藤原純友の乱の鎮静に遅れ、恩賞に不満を持つ藤原忠文を引き入れ高明は謀反を企てる。一方、秦民部の娘は吉野となりの島原で全盛の太夫「水波兵波」の矢と弓を秘蔵するが、頼大尽（頼光）は彼女の許に通い、それを入手し、うらべの貞光と彼女を結婚させる。

一方、平将門の子・良門は外記左衛門の名で播州佐用の藏人義広に仕え王位を狙うが、白菊と恋仲でもある。彼女は渡辺来^{きたる}の娘で、津の国ながらの里に母・いさらごと住んでいる。「とうせい一のびじん」である白菊を高明が乞うので、渡辺のおば方に逃がすこととなる。

そのころ渡辺綱は東寺羅生門で茨木童子の腕を切り取り、頼光のもとに持参。箕田の伯母（いさらご）は、その腕と名刀髭切丸を奪つて消える。綱からその経緯を聞いた清明が白紙を虚空に投げると、白鷲となつて飛び去る。

白菊の狂気を清明が鎮め、髭切丸を盗んだ伯母を綱が詰問すると、それを良門に与えたかつたと白状して、自害。長和三年四月一八日、良門は高明に与して謀反。坂田公時が良門を討ちとる。高明は隠岐に流罪。病身の頼光を侍女の小蝶が蜘蛛と化して襲うが、髭切丸で退ける。四天王は葛城山に住む土蜘蛛を退治する。

予言、謀反、遊里（好色）、妖術。②③④に共通する、一芳の道具立て。良門の謀反も父・将門の敵討ちの一環と考えるなら、敵討ちでも通底することになる。藤原高明、平良門の謀反に對抗する四天王。そこに織り込まれる、渡辺綱らの豪傑伝説。ちなみに、巻三の一は謡曲「羅生門」、巻五の二、三は謡曲「土蜘蛛」を典拠としている。茨木童子の腕について交わされる「おにの手じやとて、べつにかわつたものでもあるまい。すりこに毛のむしや／＼はへたやうな物であるふ。したがけのむしや／＼はへたすりこぎがにぎつて見たいと大口いひ笑ふて」（巻二の二）といった軽口。挿絵に書き込まれた短文をたどると、大まかに内容が分かる記述。なお四天王の伝説を自在に改変するのは、坂田金時と龍女の子・公平にまつわる「虚実」を「仕形断にしけるを筆ばやに書とめ」（序）たという『坂田金平太平記』（寛政三年）などの別筋統編路線を先取りするものでもあった。ちなみに、『醍醐渡辺秘鑑』は浮世草子に分類され、『坂田金平太平記』は読本とされている。言うまでもないことであるが、両者の境界はきわめて曖昧なのである。

所見本には刊記がない。ただ巻一末に「女敵討実録」、巻三末に「焰魔大王日記牒」、巻四末に「博物筌」を載せ、巻五末には次のような広告が載る。

此所にて御断申上候／一 敵討會稽錦

かたきうちかいけにしき

よみ本
輸入

全五冊／右

は諸こくにて敵討の武ゆうすくれ／武士道の意地おもしろきを
集めのする

「集め」という文面からは短編集が連想されが、未見ゆえに
判断を保留する。ただ安永二年九月二八日に割印を受けており、
そこには「安永元正月／敵討會稽錦 五冊 其芳 山口屋与兵
衛／吉文しや次郎兵衛／墨付六十三丁」とある。作者の「其芳」
は、其鳳なのか一芳なのか。それとも、両者の共作なのだろう
か。それも不明だ。まだ見ぬ該書が出現した時、もう一つの「補
注」が必要となるのかも知れない。

『諸道聴耳世間狙』『世間妾形氣』といった浮世草子から、読
本『雨月物語』へと移行した秋成。これに対し、其鳳や一芳の
それは、全く逆の軌跡を描く。その裏にちらつく、書肆吉文字
屋の影。享保一〇年（一七二五）二月八日の『女筆色緑』から安
永一〇年（一七八二）四月『月令博物筌』までの五七年間だけで
も、一七八種もの出版物を出願した吉文字屋市兵衛。其鳳や一
芳の著作は、そんな吉文字屋の多ジャンルに亘る出版物の中で
はほんの一部を占めるに過ぎない。だが、それらの数作は末期
浮世草子の位相を考える上で不可欠のものだったのである。

〔注〕

- 1 濱田啓介「吉文字屋の作者に関する研究―奥路・其鳳同一人の説など―」
（『国語国文』一九六七一年二月）。
- 2 未だ活字化されてはいないが、該書を踏まえた勝又基氏の発表には「敵
討実録について」（平成二十年度「近世後期小説の様式把握のための基礎
研究」共同研究会・於国文学研究資料館二〇〇九年一月一日）がある。
- 3 朝倉治彦・大和博幸編『享保以後江戸出版書目 新訂版』（臨川書店・
一九九三年）。
- 4 八文字屋本の『富士浅間裾野桜』（享保一五年）と、その改題改修本
『後徳丸一代記』（天明八年）の「目録」を比較し高木元は、「この「一書」
で終わるという書式は簡潔に内容を表わしていて、目録を追っただけで
一通りの筋がわかるようになっていた。実録体小説風もしくは読本風に
直されている」（高木元「江戸読本の研究―十九世紀小説様式攷」ペリカ
ン社・一九九五年）と述べている。
- 5 神谷勝広「浮世草子の挿絵―様式の変遷と問題点―」（『近世文藝』五
〇号・一九八九年六月）。
- 6 敵打ちに関しては、平出鏗二郎「敵討」（文昌閣・一九〇九年。後に中
公文庫所収・一九九〇年）。谷口眞子「武士道考―喧嘩・敵討・無礼討ち」
（角川学芸出版・二〇〇七年）などがあるが、もとよりそこには見えない。
- 7 長谷川強「浮世草子の研究」（桜楓社・一九六九年）。
- 8 前掲の拙稿では「短編奇談物」としたが、むしろ「中編奇談物」とし
た方が正しいように思う。
- 9 高田衛「お岩と伊右衛門―「四谷怪談」の深層―」（洋泉社・二〇〇二年）。
- 10 小田誠二「実録体小説の原像―「皿屋敷辨疑録」をめぐる―」（『日本
文学』一九八七年・二月）。
- 11 両書が存在については、近藤瑞木氏の示教を得た。ちなみに、『播陽政
実録』は大阪市立大学図書館のホームページで公開されている。
- 12 『兵庫県史』第四卷（兵庫県史編集委員会・一九七九年）。

- 13 『佐用郡誌』（兵庫県佐用郡役所・一九二六年）、浜田洋『佐用の史跡と伝統』（佐用郡歴史研究会・一九七三年）などには、この事件に関する記述は見えない。
- 14 中村幸彦『読本発生に関する諸問題』（『中村幸彦著述集』第五巻・中央公論社）。
- 15 刊年は、長谷川強『浮世草子考証年表—宝永以降—』（青裳書店・一九八四年）の推定に拠る。
- 16 同右。
- 17 国会図書館蔵の『絵本襍錦』は半紙本三卷三冊。外題は「復讐絵本襍錦」。刊記は「文化六年巳巳正月吉旦／書林大坂博労町／佐野や橋筋／播磨屋新兵衛」。「浪華の漁翁」が「享和酉の夏五月雨の比」に記したとする序文には「（非人の敵討の）まさことを一芳のぬしの綴り置しを綴のにしきと改め題してしりゑに絵を」添え「児の見ものに」したとある。ちなみに、そこには「絵入 敵討綴之錦 全部六冊」の広告が載り「敵討の始末ひらがなになに委敷くして面白きよみ本也 出来」とある。これが⑤に該当するかと考えられるが、早稲田大学中央図書館にある⑥の零本は⑤とは別本。ちなみに、その後河内屋藤四郎ら三都九書肆を列記する「敵討綴之錦」という江戸読本仕立ての改題改修本が上梓されたという（高木元・注4と同）。
- 18 山崎寛『改訂 日本小説書目年表』（ゆまに書房・一九七七年）。
- 19 飯倉洋一・他編「享保以後大阪出版書籍目録による吉文字屋市兵衛刊行年表稿（享保から安永まで）」（『奇談』書を手がかりとする近世中期上方仮名読物史の構築）二〇〇四・二〇〇六年度 科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書）。

（しのはら・すすむ／本学教授）